

非 択 滅 無 為

宮 下 晴 輝

0.0 は じ め に

1.0 説一切有部における「非択滅」の教義

1.1 『発智論』『婆沙論』以前の「非択滅」の規定

1.2 『婆沙論』における「非択滅」の変容

1.3 『婆沙論』以後のテキスト

2.0 『瑜伽論』における「非択滅」の批判的受容、及び

「摂決択分」中のサンスクリット断片

——（以下別稿）——

3.0 『俱舍論』における「非択滅」の定義

4.0 『順正理論』における『俱舍論』批判と「非択滅」

の教義の新展開

0.0 は じ め に

輪廻の流れがそこで止まるところとして、表現の消滅点であるということのできる「涅槃」には、むしろかえって多くの異名があるように思われる。その中の一つに、

「無為」(asaṃskṛta, asaṃkṛta 形成されずのもの)がある。そして、後のアビダルマ教義学においては、涅槃を「無為」と規定することが一般的となる。しかし、この規定の一般化は、涅槃を無為法の中の一つの法とみなすことにもなっていた。そしてこの無為法を分析する過程のなかで、「涅槃」は「択滅無為」と規定され、それに対する「非択滅無為」というきわめて特殊な概念が生まれてくる。「涅槃」からはおよそそのつながりを予想することのできなかつた言葉ともいえよう。

以下の論稿は、アビダルマ教義学の中で、「非択滅無為」という概念がどのように規定されてきたのかを整理し、そのことを通して、アビダルマ教義学史の展開の一断面を切り開こうとするものである。この教義学史の問題に立ち入っていく前に、「涅槃」をめぐるいくつかの概念についても一瞥しておくことが必要であるかと思わ

れる。しかし、それについては別稿ですでに考察したので、ここではさしあたり、それぞれの部派等に伝承された無為説を通覧しておいてから、考察に入ることにする。またそれによって、説一切有部の教義が占める位置もまた多少窺えるかと思う。

以下、いくつかの無為説を列挙する。

(1) 三無為・説一切有部

虚空 (ākāśa)・非摂減 (apratisankhyānirodha)・摂減 (pratisankhyānirodha)

(2) 四無為・『五蘊論』・Madhyadeśa の有部^③

虚空・非摂減・摂減・真如 (tathata)

(3) 八無為・『瑜伽論』・『大乘阿毘達磨集論』^④

虚空・非摂減・摂減・善法真如・不善法真如・無記法真如 (kuśālakūśalavyākṛtānaṃ dharmāṇaṃ tathata)・不動 (anīya)・想受減 (saṃjñāvedayatanirodha)

(4) 九無為・化地部^⑥

摂減・非摂減・虚空・不動・善法真如・不善法真如・無記法真如・道真如・縁起真如

…大衆部、一説部、説出世部、鷄胤部^⑦

摂減・非摂減・虚空・空無辺処・識無辺処・無所有

処・非想非非想処・縁起・道

これを見てわかるように、無為説を伝える部派の中で、有部の三無為説を踏襲しない部派はない。各部派の教義は、有部の教義学の展開にきわめて多くを負うということが出来るであろう。

1.0 説一切有部における「非摂減」の教義

説一切有部の教義が成立したのはいつ頃とすべきかは、定かではない。この学派の呼称が由来する「三世実有説」の成立をもつてこの学派の教義の成立と見なすべきであろう。そしてこの三世実有説が明瞭に述べられるのは、『識身足論』が最初と考えられる。有部の論書の成立過程の中では、『集異門足論』『法蘊足論』などが第一期の論書とされ、それに続いて『識身足論』『界身足論』などが成立したと考えられている。「非摂減」の語は、すでに第一期の論書の中に見いだされる。しかし、『婆沙論』中の確定した教義によれば、未来不生起の法について非摂減が得られるとされるから、「非摂減」という教義は「未来不生起の法」という教義概念の成立をまつてであることになる。したがって、それはさらに三世実

有説の確立以後に成立したものとしなければならぬ。
とすれば、第一期論書中の「非損減」という語は、後の
挿入ということになるであらうか。

このような事情が認められるが、『発智論』『婆沙論』
によって初めて詳細な規定が与えられていることから、
それ以前の有部の論書における規定と、それ以後の規定
とに分けて考察することとする。

1.1 『発智論』『婆沙論』以前の「非損減」の規定

I 『阿毘達磨集異門足論』

此中、有二法謂名色者、名云何。答。受蘊想蘊行
蘊識蘊及虚空損減非損減。是謂名。色云何。答。四
大種及所造色。是謂色。

(卷第一、二法品第三、T26, p. 369c7)

II 『阿毘達磨法蘊足論』

云何法處。・・虚空損減非損減。・・

(卷第十、処品第十八、T26, p. 500c22)

云何減界。謂損減非損減。是名減界。・・云何無
記界。・・及虚空非損減。・・云何非学非無学界。

・・及虚空損減非損減。・・云何無漏界。・・及虚

空損減非損減。・・云何無為界。謂虚空及二減。是
名無為界。

(卷第十一、多界品第二十、T26, p. 504c-505a)

III A *Pañcavastukam*

ākāsaṃ (ka) tarat. yad ākāsaṃ(a) sph(a)-
r(āṇaṃ)(r) ū(pa) (apratisaṃkhyānirodhaḥ)
katarah. yo nirodho na [tu] visamyogāḥ. pratisa
(m)khyānirodhaḥ ka) tarah. yo nirodhaḥ sa ca
(vi) samyo(gaḥ).

(J. Imanishi ed., *Das Pañcavastukam und die*

Pañcavastukavibhāṣā p. 8-9)

虚空とは何か。??

非損減とは何か。減であって離繫ではないものであ
る。

損減とは何か。減であってしかも離繫なるものであ
る。

B 『衆事分阿毘曇論』(求那跋陀羅訳 c. AD. 394-
468)

云何虚空。謂虚空無満容受諸色来去無礙。

云何数減。謂数減、減是解脱。

云何非数減。謂非数減、減非解脱。

(卷第一、五法品第一、T26, p. 628c24-27)

C 『阿毘達磨品類足論』(女英訳)

虚空云何。謂体空虚寬曠無礙不障色行。

非択滅云何。謂滅非離繫。

択滅云何。謂滅是離繫。

(卷第一、弁五事品第一、T26, p. 634a29-b2)

D 『薩婆多宗五事論』(法成訳 AD. 8-9C 前半)

云何虚空。所行之因即是虚空。非有障礙諸色種類不能遍覆此名虚空。

云何非択滅。謂滅非離。

云何択滅。謂滅亦離。(T26, p. 997c29-998a3)

E 『阿毘曇五法行經』(安世高訳 AD. 2C 後半)

無為何等。空、滅未離、滅不須受。・・

空為何等。虚空無所有無所著無所色是名為空。

盡尚未離為何等。已盡不復更不復著。

盡為何等。度世無為。

(T26, p. 1001b2-4)

以上が、『発智論』『婆沙論』以前に成立したと考えられる有部論書の中の「非択滅」の規定である。『集異門足論』『法蘊足論』においては、規定はなく列挙されているだけである。『五事論』(Pāṇcavastukam)において初めてその規定が与えられている。択滅と非択滅とは、と

もに「滅」(nirodha)ではあるが、それが「離繫」(解脫) (vissamyoga) であるか否かによって区別されている。

この「離繫」という教義概念も、有部独自のものである。「離繫」とは、有漏なる事態(煩惱に関わりをもつ事態)と衆生の心相続との非結合関係を表わす概念である。この非結合関係は、智慧を意味する「択」(pratisamkhyā)によってもたらされる。そして、有部の教義学において、このような特定の事態との結合・非結合関係が提唱される背景には、三世実有説がある。有部は、時の流れの中にある存在況位を超えたものとして、法(dharma)の存在を定立する。したがって、特定の法の「滅」(nirodha)とは、その法が存在しなくなったことを意味するのではなく、その法が衆生の相続と非結合の関係にあることを意味している。したがってまた、択滅も非択滅もともに「滅」と呼ばれる限り、事態は同様である。ともに非結合の関係を表わしているといえる。ただその関係が、有漏なる事態に限ってしかも智慧によってもたらされた場合に、「離繫」と呼ばれる。非択滅は離繫ではないと規定されているが故に、有漏なる事態にも、無漏なる事態に対しても成り立つ非結合関係を表わしていることになる。

1.2 『婆沙論』における「非折減」の変容

I A 『阿毘達磨発智論』(玄奘訳 A.D. 657-660)

云何折減。答。諸減是離繫。云何非折減。答。諸減非離繫。云何無常減。答。諸行散壞破没亡退是謂無常減。

非折減無常減何差別。答。非折減者、不由折力、解脱疫癘災横愁惱種種魔事行世苦法、非於貪欲調伏斷越。無常減者、諸行散壞破没亡退。是謂二減差別。

(卷第二、雜蘊第一中愛敬納息第四、T26, p. 923b6-11)

B 『阿毘曇八健度論』(僧伽提婆訳 A.D. 383)

数縁盡云何。答曰。其盡者是解脱。是謂数縁盡。非数縁盡云何。答曰。其盡者非解脱。是非数縁盡。無常云何。答曰。諸行变易減盡不住。是謂無常。無常非数縁盡有何差別。答曰。無常者諸行变易減盡不住。非数縁盡者、已脱苦患愁憂諸惱、不随欲意未得離欲。無常非数縁盡此是差別。

(卷第二、阿毘曇雜健度愛恭敬取渠第四、T26, p. 777c6-14)

C 『阿毘曇毘婆沙論』(浮陀跋摩訳 A.D. 425-427)

云何数減。答曰。若減得解脱是也。云何非数減。答

曰。若減非解脱是也。云何無常減。答曰。諸行散減是也。

問曰。非数減無常減有何差別。答曰。非数減者、疾瘦困厄自作他作苦惱種種魔事如是随世等法、若得解脱、是名非数減。無常減者令諸行散減。

(卷第十七、雜健度愛敬品中、T28, p. 121c6-27)

II A 『阿毘曇毘婆沙論』、B 『阿毘達磨大毘婆沙論』

[1-A] (121c13-16)

云何数減。・・・彼法減彼得得解脱。得解脱得是名数減。

(彼の法は減し彼の得は解脱を得。解脱の得を得る是れを数減と名づく。)

云何非数減。・・・彼法若減彼得不得解脱。不得解脱得是名非数減。

(彼の法は若しくは減するも彼の得は解脱を得ず。解脱の得を得ざる是れを非数減と名づく。)

[1-B] (161a14-17)

云何折減。・・・謂諸法減亦得離繫。得離繫得是名折減。

(諸法の減し、また、得は離繫す。離繫得を得る是れを折減と名づく。)

云何非損減。・・謂諸法減得不離繫。不得離繫得名非損減。

(諸法の減し、得は離繫せず。離繫得を得ざるを非損減と名へ。)

[2—A] (121c20-27)

問曰。非數減無常減有何差別。・・若說疾瘦困厄自作他作苦惱種種魔事等法、若得解脫、是名有漏諸行得非數減。若說隨世等法、若得解脫、是名無漏諸行得非數減。所以者何。無漏諸行亦在世故。

[2—B] (161a26-b2)

非損減無常減何差別。・・此中、解脫疫癘災橫愁惱種種魔事苦法者、顯有漏法非損減。解脫行世苦法者、顯無漏法非損減。非於貪欲調伏斷越者、顯異損減。

[3—A] (124a16-20)

云何非數減。答曰。是減非解脫。問曰。何故名非數減。答曰。不以功作而得、是名非數減。

所以者何。如人住此、四方所有色声香味触是五識身所緣法、不以功作而住不生法中。故非數減。

[3—B] (164b13-21)

問。已知非損減体非離繫、応說何故名非損減耶。答。不由損慧得此減故、名非損減。非損果故。復次、此

減不由一向劬勞一向加行一向功用簡損諸法得故、名非損減。復次、此減不由數數決損苦等得故、名非損減。

問。若爾此減由何而得。答。由緣欠故。如對一方、余方所有色声香味触等境減。於彼能緣心心所法、由緣欠故、畢竟不生。由此不生得非損減。

[4—A] (124a20-28)

問曰。以何法能得此法耶。答曰。或有說者以過去未來陰入界、非現在世。・・復有說者未來世中得、非過去。・・評曰。於未來不生法中得。如是說者好。以是故一切時常增益。

[4—B] (164b21-164c9)

問。於何世諸法得非損減耶。有作是說。於三世諸法皆得非損減。・・有余師說。但於過去未來諸法得非損減。・・或有說者。唯於未來法得非損減。非過去現在。・・評曰。此非損減唯於未來不生法得。所以者何。此減本欲遮有為法令永不生。若法不生此得便起。如與欲法繫屬有情。現在正行過去已行未來當行皆有生義。故於彼法不得此減。

『発智論』は、『五事論』の規定をそのまま受け継いでいる(一)。そして、「無常減」と「非損減」との差異

を述べるなかで、『五事論』の「離繫ではない滅」という規定を、さらに「非摂滅とは、簡摂（智慧）の力によらず、疫癘・災横・愁悩や種々の魔事といった世に行ずる苦法を解脱していることである」とする。この「簡摂によらずに苦法を解脱する」というこのところに、「非摂滅」という概念を発想するにいたった端緒が窺われるように思う。

古い經典の中に、「執着の残滓がありながら (saupatti-seṣa 有余依) 命終わっても、地獄等の悪趣をまぬがれてゐる者がある」ということを説くものがある。阿羅漢にとつては、すべての生存が消滅している。それと同様に、有学の者にとつても、なんらかの生存の消滅が問題にされる。例えば、預流果を得たものはもはや悪趣からまぬがれていることが經典中に繰り返し説かれる。また、五順下分結を断じた不還は、もはや欲界の生を受けることはないとされている。このような事態が、後の教義学の中で、「非摂滅」という概念をもつて表わされたのである。そしてそのことが、「悪趣に対して、あるいは欲界の生に対して、非摂滅を得ているからである」と説明されることになる。

『婆沙論』になると、『五事論』以来の規定が、「得」

(prāpti) という教義概念のもとに説明されている (II (CAB))。『離繫』は有漏なる事態との非結合関係を表わす概念であるが、「得」は、有漏無漏にかかわらず、より一般的な結合関係を表わす概念である。

また、『発智論』の「非摂滅とは、簡摂（智慧）の力によらず、疫癘・災横・愁悩や種々の魔事といった世に行ずる苦法を解脱していることである」という規定が、『婆沙論』において読み変えられている。『婆沙論』は、この『発智論』の文を、「疫癘・災横・愁悩や種々の魔事という苦法を解脱していること」と「世に行ずる法を解脱していること」という二つの文節に分け、前者は有漏法の非摂滅を、後者は無漏法の非摂滅を表わすとする (II (CAB))。原文にまで遡らない限り確言は出来ないともいえるが、旧訳の『婆沙論』中に引用されている「如是随世等法」は、「種種魔事」と同格と見なさねばならない (IC)。さらに『発智論』の「行世」は、元来、有為法一般を意味する言葉であらうから、やはり「種種魔事」と同格に読むほうが自然である。「行世法」（あるいは「随世等法」）を切り離して、ことさらに「無漏法」を意味するものとするところに、『婆沙論』作者たちの意図があるように思われる。『婆沙論』においてこのよう

な読み変えが必要とされたのは、非摂減を苦法からの解脱とする『発智論』の文脈では、有漏無漏に通じて成立するような「非摂減」を定式化することができなかったからといえるだろう。

すでに経典等で取り扱われていた、預流果を得ることによってもたらされる悪趣等の生存の消滅が、有部の教義の中で「非摂減」と呼称されるようになり、それが『発智論』において「簡摂によらない苦法からの解脱」とされた。ところが、『婆沙論』は、「解脱」という意味を非摂減から剝ぎ取り、「無漏法」についても非摂減があるとする。

その場合に、『婆沙論』がとった非摂減のより一般的な規定は、「縁の欠如による不生」である。この規定によって、非摂減は、有漏無漏を問わず、諸法一般に適用されることになる(III[3-AB])。例えば、心心所がある一つの対象を把握している時、その他の対象は未来から現在、過去へと過ぎ去って行くが故に、その過ぎ去ったものを対象とすることになっていた心心所は、その把握対象を消失して、もはや生ずる機会を失ってしまう。このような事態を指して、「縁の欠如による不生」といわれている。このような観点から、どういう場合にいかなる

ものについて非摂減を得るのかを、『婆沙論』は詳細に列挙する。まず生処に関し、悪趣についての非摂減、善趣についての非摂減が論じられ、次に煩惱についての非摂減が論じられ、そして聖道についての非摂減が論じられている(玄奘訳のみ T27, p. 161c 以下)。

「縁欠不生」という言葉が現われるのは、玄奘訳の『婆沙論』においてであり(II[3a]), 旧訳にはない。しかし、「非摂減」の概念が諸法一般にまで拡大され適用されているという点と同じである(II[3a])。ただ、そこに挙げられている事例は、旧訳新訳ともほぼ同趣意といえるが、ただし玄奘訳では「能縁の心心所法が、縁の欠如によって、畢竟不生になる」とするのに対し、旧訳では「色声香味触という五識身の所縁の法が、不生法中に住まる」とされている。

また、「非摂減が、三世のうちのどの法について得られるか」という設問がある(II[4aB])。それについての『婆沙論』の評家の説は、「非摂減は、未来不生法に対して得られる」とする。ここで取りあげられているいくつかの異説は、「非摂減」という教義概念が初めから「未来不生法」という有部独自の教義を前提にして発想されていたものではないことを示しているといえる。とすれ

ば、三世実有説の確立以前においても「非摂減」という教義の存在は許されるであろうから、有部の第一期の論書中にある「非摂減」という言葉は、必ずしも後の挿入とみる必要はなくなるともいえることになる。

ともかくも、「非摂減」という教義概念の意味が『婆沙論』において大きく変容したといえる。この変容がなにによってもたらされたのが問題である。多少踏み込んだ言い方をすれば、「法の分析」の観点が、連続する諸法間の関係（事態と衆生の相続との関係）から瞬間（刹那）の諸法間の関係へと移行し、前者を後者によって基礎づけるという構想があるように思われる。

1.3 『婆沙論』以後のテキスト

I 『阿毘曇甘露味論』（瞿沙造 A.D. 220-265 訳）

云何三無為。智緣盡、非智緣盡、虛空。云何智緣盡。有漏無漏智慧力諸結使斷得解脫。云何非智緣盡。未來因応生不生。是謂非智緣盡。云何虛空。無色処無對不可見。是謂虛空。

（卷下、雜品第十六、T28, p. 360a3-7）

『阿毘曇甘露味論』が成立したのは、『婆沙論』以前なのか以後なのか定かではないが、非摂減の規定は、『婆

沙論』評家の説に一致しているし、また有漏の智慧によっても摂減があるとする。ほとんど確定した教義学を反映している。

II 『舍利弗阿毘曇論』（曇摩耶舍訳 A.D. 407-423）

云何法入。・・智緣盡非智緣盡・・。（T28, p. 526c 10）云何法界。・・智緣盡非智緣盡・・。（p. 535a16）云何滅界。二滅。智緣滅非智緣滅。是名滅界。（p. 577b20）云何無為界。若法無緣是名無為界。（576b21-22）

このテキストの所屬部派は明らかではない。摂減非摂減の教義を受け入れているようであるが、三無為を立てているわけでもない。

III 『阿毘曇心論』（法勝造 A.D. 3C 半以前、僧伽提婆訳 A.D. 376）

諸法衆緣起 亦從依與緣
不具以不生 此滅非是明

一切有為法、從衆緣而生、無緣則不生。如眼識依眼依色依空依明依地依寂然。若此一切共和者便得生。

若余不具便不得生。如眠時^{補註}眼一切時生。爾時^{補註}是余事不具。眼識不得生。若彼眼識^{補註}應當生而不生、眼生已終不復更生。離此緣故、是有未來不復當生。彼起具

差異不和、是非数縁減。如是一切行盡当知。

(卷第四、雜品第九 T28, p. 831b12-20)

V 『阿毘曇心論經』(優波扇多造、那連提耶舍訖 A.D.

556-589)

依於衆縁法 有依及攀縁

若不具不生 此減非是智

有為法、依縁力能生、彼無不生。如眼識。眼色明空憶彼生和合意作眼識生。余欠一則不生、若與余識相應、念念眼生減。和合欠此眼識不生。若彼眼依識欲生、彼不生。若彼眼生減已、彼必定不復生。如是色彼縁欠、彼眼識未來減不復生。如是余識身如得生說。若彼生減、彼初非智縁。如是事不数数而減、名非数減。略説、未來不生法中、縁欠畢竟不生、自然減、名非数減。

(卷第六、雜品第九 T28, p. 866b29-c10)

V 『雜阿毘曇心論』(法救造、僧伽跋摩訖 A.D. 433)

依於諸縁法 有依及境界

不具則不生 此減非是明

一切有為法、依縁及境界力生。羸劣故。彼非分則不生。如眼識依眼色明空及彼憶念和合故生。一一不具則不生。余識現在前時、念念頃余眼減余眼生。衆縁

不具故眼識不得生。若眼識依彼眼生者則不生。依等已減故至竟不生。以先無方便而減故説非数減。如眼識、一切識身亦如是。

又無漏者、隨信行道進得、隨法行道非数減。一切道亦如是。隨其義盡当知。問。若此勝進道得、何故非道果撰。答。為余事故。断煩惱故。勤方便不為非数減故。是故非道果撰。

(卷第九、雜品第九 T28, p. 944a11-23)

『阿毘曇心論』の作者、法勝は、三世紀半より以前の人と考えられる。彼が伝える「非摂減」の教義は、『婆沙論』にいたって初めて展開されたものと見なさねばならない。もしも『阿毘曇心論』が『発智論』や『婆沙論』の伝承と離れて成立したものであるとするならば、「非摂減」の規定は少なくとも『五事論』の域を越えないものであったであろう。しかしながら、『阿毘曇心論』は、おそらく「非摂減」という言葉が初めに意味していたであろう「智慧によらない苦法からの解脱」といった事態についてまったく言及せず、いきなり「一切の有為法」についての非摂減を説く。『婆沙論』の種々の異説を考慮するならば、『阿毘曇心論』が離れた伝承のもとに成立したとするには、その教義が整理されすぎている。し

たがって『阿毘曇心論』は、ある時点における『婆沙論』の最も意を注いだところをそのまま伝えていると見なすべきであろう。とすれば、『婆沙論』のこの説も、少なくとも三世紀半ばより以前には成立していたということが出来る。

Ⅲ『阿毘曇心論』、Ⅳ『阿毘曇心論経』、Ⅴ『雜阿毘曇心論』の各々の記述を概略しておこう。

Ⅲ 一切の有為法は、種々の縁によって生ずる。縁がなければ生ずることはない。例えば眼識は、眼根、色、空間、明り、地、寂然(じ)等が和合すれば、生ずる。もしも一つでも欠ければ眼識は生じない。眠っているときには、眼根は常に生じては滅するけれども、すべての縁がそろっていないから、その時の眼根によって生ずべき眼識は生じない。そしてその眼根はすでに生じ終わってもはや再び生じないが故に、生ずべきであった眼識は、その縁をもう失って、未来にあって決して生ずることがなくなる。このように、生起の縁がそろわないこと、これが非数縁滅である。

Ⅳ 有為法は、縁の力によって生ずるが、縁がなければ生じない。例えば眼識は、眼根、色、明り、空

間、憶念(作意?)等が和合すれば、生ずる。一つでも欠ければ生じない。もし他の識が生じていれば、眼根のみが瞬間ごとに生じ滅していく。縁がそろっていないので眼識は生じない。その眼根は生じ終わって再び生じないので、縁が欠けて、その眼識も未来に滅して再び生ずることがない。このように、智慧による修習を繰り返さずに(非数数)滅することを、非数滅という。要約すれば、未来不生法のなかで縁欠によってついに生ぜず、自然に滅することを、非数滅という。

Ⅴ 一切の有為法は、弱体であるから、縁が境界の力によって生ずる。^⑭その縁や境界がともに与って作用しないならば(非分||彼同分 tatrabhāga)、^⑮生じない。例えば眼識は、眼根、色、明り、空間、憶念等が和合して生ずる。一つでもそろわなければ生じない。他の識が起こっているとき、瞬間ごとに別々の眼根が生じ滅する。種々の縁がそろわないが故に、眼識は生じない。その眼根によって生ずべき眼識であれば、その眼識は生じない。依り所などがすでに消滅しているので、ついにその眼識は生ずることがない。なんの方策をももちいずに滅するが故に、非

数減というのである。

また、無漏法の場合には、例えば、随信行道の者 (śraddhānusārin) が修道にいたって信解者 (śraddhā-dhimukta) となれば、随法行道は非数減となる。

もしこの非数減が、修道にいたるといって勝進道によって得られたものであるとすれば、どうして非数減は道果に含まれないのか。なぜならば、勝進道は煩惱を断するためであり、その努力は非数減のためにあるのではないからである。¹⁶⁾

2.0 『瑜伽論』における「非摂減」の批判的受容、及び「摂決摂分」中のサン

スクリット断片

『瑜伽論』では、「本地分」中に八無為が列挙され、その中に「非摂減」が言及されている。¹⁷⁾しかし「非摂減」についての説明は「摂決摂分」においてなされ、近年報告された「摂決摂分」のサンスクリット断片の中に、その当該箇所が見られる。

以下、サンスクリット断片中「非摂減」に關説する部分の校訂テキスト(Ⅰ)¹⁸⁾、チベット訳(Ⅱ)、漢訳(Ⅲ)、試訳(Ⅳ)を順に記載しておく。

1 apratisamkhyānirodhaḥ katamaḥ (/) tadany-
asmin upatīti pratyaye saṃmukhibhūte tadan-
yotpātitaḥ tadanyānupatīti vyapaśamanirodha-
mātrakaṃ apratisamkhyānirodha ity u(cyate) /
.....atikrā)ntaḥ sa tena samayena punar na jā-
tūpadyate / tasmāt so 'pi prajāpīto 'sti na
dravyato na hi tasyānyat kinpit svalakṣaṇam
upalabhyate /

sā tu dharmajātir avisamyogāt punar anyena
samayena pratyayam āsādyotpadyate / tasmān
naivaikāntiko 'pratisamkhyānirodhaḥ (/ /)

śaikṣas tu dīṣṭapado 'ṇḍajasaṃvedaḥ (.....
stri) saṃdhapaṇḍakāvyarṇaṇanobhayaṃ rṇaṇaṇa-
pateḥ punarbhavavīṣṇāpranīdhānebhyaḥ yam
apratīsamkhyānīrodhaṃ pralībhate sa ekānti-
ko vaktavyaḥ // na hi jātu śaikṣo dīṣṭapadaḥ
punarbhavābhīlāśapranīdhānaparyavasthitaḥ p-
unarbhavam abhinirvartayati / nānyatrāsamud-
ghātītavān nibheṣatīṣṇābijasya //

(Mironov Catalog No. 421, Folio No. 16
Verso 6-8)

≡ so sor btags(D. brtags) pa ma yin paḥi ḥgog
 pa gañ she na/de las gshan pa skye baḥi
 rkyen mñon du gyur ba na de las gshan pa skye
 bas/de las gshan pa mi skye shin ñe bar shi
 baḥi ḥgog pa tsam ni so sor btags(D. brtags)
 pa ma yin paḥi ḥgog pa shes bya ste/gaṇ deḥi
 tshe na ma skyes shin skye baḥi dus las thal ba
 de ni deḥi tshe na ma yañ skye bar mi ḥgyur
 bas/deḥi phyir de yañ btags (D. brtags) paḥi
 yod pa yin gyi rjes su yod pa ni ma yin te/
 deḥi rañ gi mtshan ñid ni gshan cuñ zad kyañ
 mi dmigs so/

/de yañ chos kyi nam pa dañ ma bral baḥi
 phyir dus gshan gyi tshe rkyen dañ phrad na
 ḥbyuñ bar ḥgyur bas deḥi phyir so sor btags
 (D. brtags) pa ma yin paḥi ḥgog pa de ni gtan
 du ba ma yin no/

/slob pa gshi(F. D. bshi) mñon ba de sgo ña
 las skye ba dañ/drod gser las skye baḥi skye
 gnas dañ/byañ gi sgra mi sñan du skye ba
 dañ/ḥdu ses med pa paḥi sems can du skye

ba dañ/bud med dañ/za ma dañ/ma niñ dañ
 /mtshan med dañ/mtshan gñis par skye ba
 dañ/yañ ḥbyuñ baḥi srid pa la sred cin smon
 pa dag so sor btags(D. brtags) pa ma yin paḥi
 ḥgog pa ḥthob(D. thob) pa de ni gtan du ba
 yin par rig par byaḥo//slob pa gshi(F. D. bshi)
 mñon ba ni nam yañ/yañ ḥbyuñ baḥi srid pa
 la mñon par ḥdod cin smon paḥi kun nas dkris
 bas yañ ḥbyuñ baḥi srid pa mñon par sgrub
 bar mi byed de/sred(D. srid) paḥi sa bon lhag
 ma ma lus par yañ dag par ma bcom pa kho
 na tsam du zad do/

(Peking ed. 39b2-8; Derge ed. 37a-b)

Ⅲ 復次云何非寂滅。謂若余法生緣現前。余法生故
 余不得生。唯滅唯靜名非寂滅。諸所有法此時心生越
 生時故、彼於此時終不更生。是故此滅亦此假有非實
 物有。所以者何。此無有余自相可得故。

此法種類非離繫故。復於余時遇緣可生。是故非寂
 滅非一向決定。

若學見跡、於卵濕二生北拘盧洲無想天若女若扇攏
 迦若半攏迦無形二形等生、及於後有若愛若願、所得

非摂滅、当知一向決定。由学見迹嘗不於後有起希願
纏發生後有。唯除未無余永害愛種子故。

(卷第五十二、摂決摂分中五識身相応地意地 T30、

53a19-b1)

Ⅳ 非摂滅とは何か。なんらかの生起の縁が現前しているとき、あるものが生起することによって、他のものの不生起、静寂、単なる消滅「がある。それが」非摂滅といわれる。その時に生起せず、生起の時を過ぎてしまったものは、その時にはや生ずることは決してない。したがって、それ「非摂滅」もまた表現「機制」の上で存在するのであって、実体として存在するのではない。なぜなら、それについての固有相が何も他に認められないからである。¹⁰⁾

然るに、「これは」非結合(離繫)ではないが故に、それと同種の *charma* は、他の時に縁に出会い、再び生起する。したがって、非摂滅は、「消滅という点で」決定的なものではない。

ただし、「聖諦という」立脚地を見た有学者は、卵生や湿生として生まれること、あるいはクル洲に生まれること、無想天の衆生に生まれること、あるいは、女性として、生来的にまたは後天的に性機能

の無い者として、二つの性機能を持つ者として生まれることに対して、「及び」次の生存への渴望と願望に対して、非摂滅を得ており、それは決定的なものであると知るべきである。なぜなら、「聖諦という」立脚地を見た有学者が、次の生存への希求と願望に占有され、次の生存を現起するなどということは決してないからである。すなわち、渴望の種子が残らず全断されていない場合を除いては、「次の生存を現起することは」ないのである。

『瑜伽論』もまた、その教義学の多くを説一切有部に負っている。したがって、説一切有部の教義学中に現われる教義概念のほとんどが『瑜伽論』中に見いだされる。しかしながら、それらの教義概念は、説一切有部の教義学にとって意義あるものであるが、教義学の意図が異なっていると思われる『瑜伽論』では、用いる必要がないようなものもある。用いることによってかえってその教義学全体の整合性を失う場合もある。しかし、教義学全体の整合性を図ることは、『瑜伽論』にとってさほど重要なことではないようにも思える。さまざまな教義概念が『瑜伽論』のなかで混沌としている。それらの教義概念が発想された地平を、時にはそのまま、時には無視し、

かなり自由に取り入れて、むしろそれらを取りあげてくるとき『瑜伽論』独自の視角こそが大切であるかのようと思われる。

『瑜伽論』は、非摂滅の教義を、『婆沙論』が展開したその頂点から、すなわち諸法一般にまで拡大された非摂滅の教義を取り入れている。ところが、『瑜伽論』と『婆沙論』では、その法の定立の仕方がまったく異なる。三世実行有説による『婆沙論』では未来不立法について非摂滅が説かれるが、未来や過去の法には自性がないとする『瑜伽論』の場合、「未来不立法」という概念はなんら積極的な意味をもたない。したがって「非摂滅」は、「あるものの生起による、他のものの不生起、単なる消滅」と規定される。未来不立法中になんらかの法が住まるといえるのではなく、ある法が生起の時を失って生じなかったことそのことが「非摂滅」であるとされる。それ故、このような「不生起」や「単なる消滅」という事態そのものが、なんらかの自性をもった法として定立される余地はない。だから、「それ〔非摂滅〕もまた表現〔機制〕の上で存在するのであって、実体として存在するのではない」とする。そしてさらに、非摂滅というその消滅は、何も決定的なものではなく、縁に出会えば再

び同種の法が生起するという。このように、一切の有為法にまで拡大された非摂滅は、『瑜伽論』においては、ほとんど無化され、なんら特別の意味もない、無用の概念となってしまった。

『瑜伽論』が説一切有部の教義概念の一端を取りあげるのは、それを受容することよりも、むしろ無化するためではないかとも思われる。ほとんど否認に近いかたちで非摂滅を論評した後で、まったく趣を変えて、聖者は悪趣等の生存に非摂滅を得ており、それは決定的なものである、とする。この事態そのものは、先にも指摘したごとく、すでに經典等で述べられてきたことであつた。それについては『瑜伽論』も承認するのである。とすれば、『瑜伽論』において否認されているのは、特に『婆沙論』において展開した部分であるということも出来る。さらに、「非摂滅」という概念は単なる消滅という事態を指すにすぎないから、この場合の消滅が決定的である理由は別のところに求められねばならない。そこで『瑜伽論』はその点について、聖者が再び悪趣等の生存に墮することはあり得ないからであるとすると。そしてそれを言い換えて「種子の全断」(bījaśamudghāta)という。

ところで、種子の断は智慧によるものである。とすれ

ば、この場合、「智慧によらない苦法からの解脱」とされた「非摂減」という意味はまったく無視されているといえよう。

『大乘阿毘達磨集論』では、『五事論』の規定が繰り返されているだけである。そしてその註釈では、「減であつて離繫ではない」ことの理由を「随眠が全断されていないから」(anusayasamudghata)としている^①。しかしながら、『瑜伽論』では、決定的な消滅としての「非摂減」を「種子の全断」とするのであるから、「随眠が全断されていない消滅が非摂減である」という規定は無意味である。

いずれにせよ、『瑜伽論』も『大乘阿毘達磨集論』も、説一切有部の「非摂減」という教義概念は用いながらも、その教義学とはまったく異なった方向を示しているといえよう。

(以下、『俱舍論』、『五蘊論』、『順正理論』、ステイラマティの『俱舍論』註釈等を取りあげていかねばならないが、紙幅も尽きたので、稿を改めることとした)。

なお、この稿は一九八五年十一月二十二日、大谷大学仏教学会の研究発表例会において発表した資料にもとづいたものである。

註

① 拙稿「涅槃についての一考察」(『大谷学報』第69巻第1号、一九八九)参照。

② *Pāncasakadhyāyikāraṇa*, Peking ed. 17b3.

③ 「Madhyadeśaの有部」について、*Jāṇasrāsaṃuccaya* (Peking ed. vol. 95, No. 5252, 483-5)を参照。この点ツルティム・ケサン氏より御教示いただいた。同氏の著書『インド仏教思想史』(日藏仏教文化叢書1、西藏仏教文化協会、一九八八)上巻二一八頁参照。

④ *Yogācārabhūmi*, Bhattacharya ed. p. 69, 47; T30, 293c.

⑤ *Abhidharmasamuccaya*, Peking ed. 62b5-6.

⑥ *Samayabhedā*, Teramoto ed. pp. 72-73.

⑦ *ibid.* p. 33.

⑧ この場合逆に、「非摂減」という語があるから、すでに第一期の論書において三世実有説が確立していたとも考えられる。例えば、桜部建『俱舍論の研究』(一九六九)一〇八頁参照。この点は、「非摂減」という概念の成立をどのように見るにかかっている。

⑨ 「繫」(samyoga 結合)に関しては、拙稿「連合と結合」『印仏研』三三―二、一九八四)参照。

⑩ AN iv 378, Saupadisesasutta. この経は、「執着の残滓があるままで命終わる者はすなわて、地獄等の悪趣から解脱しない」(aparimutto niraya aparimutto tiracchāna-yoniya……)という外道の意見に納得できなかった舍利弗が、世尊にそのことを質問し、世尊が答える、というか

たちではじまる。執着の残滓があっても悪趣から解脱している者を九種挙げている。その九種の人 (puggala) とは、*antarāparinibbāyī*, *upācaccaparinibbāyī*, *asankharaparinibbāyī*, *sasankharaparinibbāyī*, *uddhamsoṭo akaniṭṭhagāmi*, *sakadāgāmi*, *ekabijī*, *kolaṅkolo*, *sattakkhatuparamo* である。

また、“*saupādisesa*” という語が「執着の残滓ある」を意味し、ほとんどの場合は「有学」を指すという点については、前出拙稿「涅槃についての一考察」参照のこと。

¹¹ SN v 342 以下の「預流相応」の諸経を見よ。

¹² エーリヒ・フラウワルナー「アビダルマ研究」(ABHIDHARMA-STUDIEN)『仏教学セミナー』第40号、一九八四)一〇五頁註②参照。

¹³ AKBh 92. 11 には、他者の説として、非摂減を「それ自身の本性によって減すること」(*svarasanirodha*)とする説を引いている。

¹⁴ 『婆沙』T27, p. 680c25-27 には、同趣旨のことが述べられている。拙稿『俱舍論』における本無今有論の背景』(『仏教学セミナー』第44号、一九八六)二二頁参照。

¹⁵ 『雜阿毘曇心論』の「非分」については、T28, p. 876b20 以下参照。拙稿「同分彼同分について」(『印仏研』三五—二、一九八七)参照。

¹⁶ 勝進時における非摂減の得が道果の撰でない理由については、『婆沙』(T27, p. 166a20 ff.) 参照。また、果法、非果法については、『品類足論』(T26, p. 716b9-11) 及び『婆沙』(T27, p. 166a26-27) 参照。

cf. AKBh 91. 2: *phalaṃ dharmaṃ katame, saṃskṛtā dharmā pratisaṃkhyānirodhaṃ ceti sāstram*.

¹⁷ Bhattacharya ed. *Yogācārabhūmi* p. 69. 4-7; T30, p. 293c.

¹⁸ 松田和信「タライラフ13世寄贈の一連のネパール系写本について——『瑜伽論』「摂決摂分」梵文断簡発見記——」(『日本西蔵学会会報』第34号、一六二〇頁、一九八八) 参照。以下に載せたサンスクリット文は、松田氏の好意による。筆者が「摂決摂分」中の「非摂減」について多大な関心を寄せていることを知って、松田氏は写本のコピーと写本を判読しローマナイズしたものを筆者に届けてくれた。それからずいぶんと月日が経ったが、論稿全体の構想がまとまらないためにまことに失礼をした。サンスクリットの読みは松田氏にまったく依存しているが、節の区切りは筆者が仮にもうけたものである。文法上破格ではないかと思われるものや、サンディの不規則なものもあるが、できるだけ写本のままここに掲載した。

¹⁹ 「立脚地を見た」(*dr̥ṣṭipada*)という語に関し、この語の古い用例として、『スッタニパータ』232 の “*abhabbata diṭṭhapadassa vutta*” を挙げることが出来る。この箇所は “*diṭṭhanibbānapadassa dassanasaṃpannassa puggalassa abhabbata vuttā ti atto*” (*Paramuttajōtiṭṭā* I p. 191) と註釈されている。村上真完・及川真介『仏のことば註(二)』(一九八六)二八三、三二三頁註⑤参照。

あるいは、AN iv 103 の “*aṇṇatra diṭṭhapadehi*” を挙げるができる。この文脈を示しては、[や]、

比丘たちよ、この大地と須弥山王とが焼かれ、壊され、存在しなくなるであろうなど」と、いったい誰が思い、誰が信じているのである。dīṭṭhapada たゞの他に「誰が信じているか」。(p. 103, 21-23) 註釈は “dīṭṭhapade sotāpanne ariyasāyake tṭhapetva” (*Manorathapurani* iv, p. 52) である。

前者では「涅槃という立脚地を見た者」、後者は「預流の聖弟子」と註釈されている。『婆沙論』にも「学見迹」についての説明がある。「学謂預流一來不還補特伽羅。迹謂四聖諦。以無漏慧已具見四諦迹故名学見迹。」(T27, p. 553c5-7)。

- ②⑥ *Abhidharmasamuccaya*, Peking ed. 62b5-6; *Abhidharmasamuccayabhāṣya*, Tatia ed. p. 15, 3-4.

〔補註〕大正大藏經のナグスマーは「如眼時眠」である。